

## 月日の鼠（無常の虎）

おことわり

五月十四日より風邪にかゝり腸をこわして福山中井外科医院に於て治療して頂きました。ついでには福山光明寺の会座を全うせず、大阪、住吉、和歌山の同胞にお目にかからず、お待ち下さったのに、これを裏切り、尊き時を病床にあつて、御迷惑をおかけしたこと誠に申わけない次第であります。これ全く能忍順縁せず、如来聖人の御冥見を恥ぢ奉らざる悪業の報いであります。本部の鳴井さんから「子供の病が親不孝ならば、親の病は何でありますか」との愚妻に托しての伝言に対して「親の病氣も親不孝です」と答へました。病氣して皆様の御親切、誠にもつたいたいなく身にしてみました。私自身よりも、同胞のみ心を痛めましたこと、何とも申しわけもございません。謹んでおわび申し上げます。しかしもう元氣になりましたして、岡山支部の講座もすませて本部に帰りました。どうか御安心下さい。（五月二十八日）

### 浄名経の七喩

註維摩詰經（十卷）といふお聖教は、支那東晋時代（凡そ今から一千五百六十年位前）の、僧肇の書いたもので、維摩経を註解したものでありますが、その註維摩詰經第二卷に、維摩経方便品に

「是の身は丘井の如し。」（是身丘井）

とある言を解釈して次の如く言っております。先づ原文のまゝ出して次に読み方も出しておきます。

是身如丘井什曰、丘井丘墟枯井也。昔有人有罪於王。其人怖罪逃走。王令醉象逐之。其人怖急自投枯井。牛井得一腐草。以手執之。下有惡龍吐毒向之。傍有五毒蛇復欲加害。二鼠嚼草復將断。大象臨其上復欲取之。其人危苦極大恐怖。上有一樹。樹上時有密滴落其口中。以著味故而忘断。大象臨其上復欲取之。其人危苦極大恐怖。上有一樹。樹上時有一密滴落其口中。以著味故而忘怖畏。

丘井生死也。醉象無常也。毒龍惡道也。五毒蛇五陰也。腐草命根也。黑白二鼠日月黒月也。蜜滴五欲樂也。得蜜滴而忘怖畏者、喩衆生得五欲蜜滴不畏苦也。

「是身は丘井の如しとは、什曰く、丘井とは、丘墟こしやう枯井なり。昔人有りて王に罪せらるること有り。其の人罪を怖れて逃げ去る。王は醉象をして之れを逐はしむるに、其の人怖れて急に自ら枯井に投ず。半井にして一腐草を得たり、手を以つて之れを執る。下に悪龍有り。毒を吐いて之れに向ふ。傍に五毒の蛇有り、復害を加へんと欲す。二鼠は草を嚼みて、草復断れんとす。大象其の上に臨み復之れを取らんと欲す。其の人危苦し、極大はなはだしく恐怖す。上に一樹有り、樹上時に蜜滴有りて其の口中に落つ。味に著するを以ての故に怖畏を忘る。

丘井とは生死なり。醉象とは無常なり。毒龍とは惡道なり。五の毒蛇とは五陰なり。腐草とは命根なり。黑白二鼠とは白月黒月なり。蜜滴とは五欲の樂なり。蜜滴を得て怖畏を忘るとは衆生の五欲の蜜滴を得て、苦を畏れざるに喩ふるなり。」

以上の説は通俗に「月日の鼠」又は「無常の虎」と言われている喩でありまして、いわゆる、浄名経（維摩経）の七喩と言われるものであります。衆生の無自覚な現実を曝露されたものであります。

猶、「賓頭盧突羅闍為優延王説法経」（求那跋陀羅訳一卷）には、同じ喩が、十二段になつて、

「曠野とは生死に喩へ、彼男子とは凡夫に喩へ、象とは無常に喩へ、丘井とは人身に喩へ、樹根とは人命に喩へ、白黒の鼠とは昼夜に喩へ、樹根をかむとは念々の滅に喩へ、四毒蛇とは四大に喩へ、蜜とは五欲に喩へ、衆蜂とは悪覚觀に喩へ、野火の焼くは老に喩へ、下の毒龍は死に喩ふ」とあります。世間普通言われているのは、この二説がつきまぜられているようであります。

### 生死無常

「是の身は丘井の如しとは、什日く、丘井とは丘墟の枯井なり。」

什というのは、僧肇の師、鳩摩羅什のことであります。維摩経の中の「是の身は丘井の如し」とあるのを鳩摩羅什はかく説かれたというのであります。丘墟とは、丘の上の城跡ということ、丘の上の城跡に枯井、即ちふる井戸があるということでもあります。

昔一人の男があつて、悪いことをして王に罰せられようとした。その男は罪を怖れて逃げ去つた。そこで王は酔うた象をしてその後を追わしめた。男は大いに怖れて、自ら丘の上の枯井に入った。

幸に井戸には一本の草が下つているのでこれを握つた。それによつて底にのがれんとすれば、底には悪龍が毒を吐いて向つて来る。傍には、五匹の毒蛇があつて害を加へようとする。更に又樹の上には、白黒二匹の鼠がいてかわるがわる草をかんでいる。上に出ようとすれば、大象が臨んでいる。然るに、上の樹からは蜜が滴つて来る。それが口に入りはじめると、男はその味に執着して一切の怖畏を忘れる、これが譬喩の筋書であります。

これを解釈して、

(1)「丘井とは生死なり」丘墟の井戸というのは生死のことである。油断のならぬ生死の井戸であります。我らはこの生死の井の中にいると言われるのであります。病氣でもするとつくづく思われるのであります。

(2)「醉象とは無常なり」この酔うた象が、何時のほどにか、虎になつて絵などには、虎が描かれています。我らは念々刻々、この象に虎にねらわれています。誠に生死無常であります。

賓頭盧突羅闍為優延王説法経では

「曠野とは生死に喩へ、彼の男子とは凡夫に喩へ、象とは無常に喩へ、丘井とは人身に喩ふ。」

となつているのも注意すべきであります。一切は凡夫たるこの人身に備えているのであります。

### 三毒五欲

無常の中にありつつ、しかも凡夫は三毒五欲にせめられています。

(3)「毒龍とは悪道なり」下には、三匹の龍が、頭をもたげて今にも呑もうとしています。貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の大蛇であります。悪道とは、三毒によっておこる地獄、餓鬼、畜生であります。今にもこの悪道にのまれんとしているのであります。

(4)「五の毒蛇とは五陰なり」横からは、五匹の毒蛇が害を加えます。毒蛇とは五陰、即ち色、受、想、行、識とて、肉体と精神との五つの要素であります。

(5)「腐草とは命根なり」腐れた草というのが、或るものには「緑藤」即ち藤のつるとなっています。どちらにしても凡夫の「命根」五十年の命であります。三毒の龍、五陰の毒蛇の中に五十年の命を保っているであります。

(6)「黒白の二鼠とは白月黒月なり」草の蔓をかんでいる黒白の鼠とは、白月黒月である。白月とは月の中上の十五日のこと、黒月とは下の十五日のことであります。しかし先の十二段の分では「白黒の鼠とは、昼夜に喩ふ。」とあります。いずれにしても、月日のたつことでもあります。我らの命根は、誠に昼夜日々、月々の鼠によって噛まれています。急がしいことでもあります。善導大師往生礼讃偈に云く

「中夜の偈に云く

汝等臭き屍を抱きて臥すること勿れ。種々の不浄を仮に人と名く。重病を得れば箭の体に入るが如し。衆の苦痛集るに安んぞ眠るべき。

後夜の偈に云はく

時光遷り流転して、勿ちに五更に至る。無常念々に至り、恒に死王と居す。諸の行道の者に勧む、勤修して無余に至れ。

日中の偈に云く

人生れて精進せざれば、喩へば樹の根無きが如し。華を採りて日中に置けば、能く幾の時か鮮かなることを得る。人の命も亦是の如し。無常須臾の間なり。諸の行道衆に勧む。勤修して乃ち真に至れ。」誠に頂戴すべきであります。

(7)「蜜滴とは五欲の楽なり。蜜滴を得て怖畏を忘るゝは、衆生の五欲の蜜滴を得て苦を畏れざるに喩ふるなり。」

かゝる恐るべき境遇にありつつ、彼の男は、上から滴る蜜をなめて、一切の苦を畏れず忘れていたのであります。五欲とは、睡眠欲、貪欲、財欲、名利欲、色欲であります。この五欲の楽しみに心を奪れて一切の畏れを忘れるとは情ないことでもあります。しかしながら誠に衆生のありのままの相であります。

### 如来金剛の救い

世尊は「法鼓を叩き」たまう。法鼓をたたくととは、陣中に兵を誠むるが如く、世尊が一切衆生に、南無阿弥陀仏の金鼓をたたいて試めたまうことであります。我らは幸にも、この凡夫の相をかすかに知らされて、生死無常にさめ、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、念仏のみぞまことにておはします。」との聖人の念仏の世界に同心せしめられたこと、

誠に有難いことであります。人の命は、腐れた草の如くもろきものであります。如来の御命は無量寿であります。腐草須臾の命を無量寿の命にして下さる、念仏せざるを得ません。我らは依然として五欲の蜜をなめてはいる。しかし五欲が命であつてはならない。我らの命は南無阿弥陀仏であります。如来金剛の命の綱は、まことにこうした生死無常の現実の唯中に与えられているのであります。念仏すべきであります。何時もうるさくつきまとふ悪覚観の衆蜂、眼先の蜂を追いつつ、五欲の蜜に心を奪われて、永遠の道を失ふことは残念であります。

如来は無所畏とて、一切に畏れたまわぬのであります。菩薩もまた無所畏の境に任しているものであります。凡夫は畏れを忘れて、苦を畏れないのであり、仏菩薩は、畏れを対治し超越したのであります。如来を師子に喩えられ、如来の説法を師子吼と言われるのは、誠に無畏に住したまうが故であります。我らもまた、如来本願に救われ、やがて真実の無畏に至らねばなりません。如来の智慧光は、我らのありのままの現実を知りつくさしめ、やがて一切の手のとどかぬ、常住の世界に至らしめたまうのであります。ありのままにさめて念仏すべきであります。

附記 去る四月石州吉田の片山家に有難き一日の招請にあいながら、様々の事情によつて、その依倚に背きました、近頃病床にあつて、色々と思うことあり、特に無常について考えさせられ、両々もつて、この一篇を掲げた次第です。片山の老姉許したまえ。